コルネリオ会

(防衛関係キリスト者の会)

ニュースレターNo.108

2005年 5月

喜び、祈り、感謝する

コルネリオ会会員　圓林栄喜

はじめに

御名を賛美いたします。平成１５年３月から平成１７年３月の２年間、中隊長を拝命し、充実した日々を送ることができました。今回は、中隊長時代に体験し、感じたことについて述べてみたいと思います。

喜ぶクリスチャン

私のいた部隊では、幹部で私を含め３名のクリスチャンがいました。２名ともカトリックの方でしたが、個性的で非常に人間味のある方々でした。一人の方は、趣味がギターで、作詞作曲もされ、部隊の隊歌も作られるという才能の持ち主でした。誰とでも気さくに話され、憎めない性格と常に冗談を言われる明るい性格は本当に神から与えられた賜物であると思わされました。

もう一人の方も非常に明るく、よく話される方でしたが、親分肌の自分の信念を曲げない、思ったことはずばずば発言される方でした。まわりの評価はそれぞれ違いましたが、私は良く相談にのってもらいました。厳しさと優しさを兼ね備えた方で、私にはないものを持っておられる方でしたので、いまでも尊敬している方の一人です。

クリスチャンはややもすると品行方正、真面目でとっつきにくい印象を与えるものなのですが、この方々については、逆にこれまでのクリスチャンというイメージからはかなりかけ離れた存在として写りました。クリスチャンとは罪許された罪人でしかなく、自分の不十分なところを覆い隠すのではなく、自然体で歩める人々なのではないだろうかと思わせられました。特に明るさや喜びといったものをいつも神様から与えられている人は、信仰者として、本当に恵みだなと思いました。

祈りの必要性

クリスチャンとして、中隊の隊員にできたことはこのことだけだったかもしれません。私が着任してから離任するまで、ほぼ毎日、「中隊の隊員、家族をあらゆる事故、怪我、病気、災い、悪しきものからお守りください。」と祈りました。それでも、病気で休む隊員もいれば、家族がなくなられる隊員もいました。問題が生じることも多々ありました。「なんだ、祈りは答えられなかったんだ。」という感じる方もいると思います。しかし、祈りをすることで、起こってくる出来事は「神の許しなしには起こりえないのだ。」という思いが与えられました。言い換えれば、「神は私の祈りを聞いておられる。それでもなお、起こることは神の計画であり、きっと何かの理由があるのだ。」という思いです。そのような中で、いま振り返って見ますと、それがかえってよい結果を生み出すことにもつながっていることを覚えます。まさしく「神のなさることは、すべて時にかなって美しい。神はまた、人の心に永遠への思いを与えられた。しかし、人は、神が行なわれるみわざを、初めから終わりまで見きわめることができない。」
伝道者の書３：１１のとおりだと思います。
昨年、父が急に亡くなりました。なぜ今父は亡くなったのか？今でもわかりませんが、中隊長を終えて、今こうして生まれ故郷で勤務できていること、母や祖父母の喜ぶ顔を見ていますと、そのことも神の計画のう

ちにあったのだろうと思います。

感謝の思い

中隊長の間、言い続けてきたことがあります。「周囲への感謝を忘れないように」ということでした。これは、私が幹部学校の教育部長から伺った言葉です。「君たちが試験でここに来ているときにも、部隊は動いているのだ。そのことに感謝しなさい。」といわれたことを覚えています。ややもすると、自分のことばかり考えてしまう自分に対しての戒めの言葉でもあります。確かに、昇任も、表彰されるのも本人の努力は当然なのですが、その人を支えた先輩、同僚、後輩そして家族がいることを忘れないようにということだろうと認識しました。私自身も、本当に自分一人では何もできませんが、中隊長として、自分のやりたいと思うことを中隊の隊員の皆さんにさせてもらったという感謝の思いが残ります。思いどおりにならず、いらいらしていたり、隊員に不満を持つときに限って、自分自身の弱さを思い知らされたことが何回もありました。部隊経験のほとんどない自分がよく２年間も中隊長がつとまったものです。感謝の気持ちを忘れないように、これからも心がけるつもりです。私の恩師は、いつも「ありがとう、ありがとう」と会うたびに言っておられましたが、それも感謝の気持ちの表れなのだと思います。

最後に

「いつも喜んでいなさい。絶えず祈りなさい。すべての事について、感謝しなさい。これが、キリスト・イエスにあって神があなたがたに望んでおられることです。」　　Ｉテサロニケ５：１６～１８

とありますが、これからも御言葉のような人生を歩ませていただきたいと思っています。兄弟姉妹の皆様の尊い祈りにも支えられてきたことを感謝しています。本当にありがとうございました。

日本は偶像国か

コルネリオ会名誉会長工学博士　今井健次

終戦と同時に大量に入って来たキリスト教の宣教師に会い、彼らの知性と謙遜さに打たれて、キリスト教を信じたいと思った。　しかし聖書にある人の子イエスを神の子と信ずる事に矛盾を感じ、その崇高な教えと，聖霊による不思議なわざには感激を受けながらも釈然としない時期があった。

しかし聖書に親しんでいる合間に「イザヤ書３０章２０節－２１節」のみことばが常に私を励まし助けて下さった。そしてくり返しみことばを学ぶ時　「エペソ６：１０」「主にあって」と言うみことばに突き当たった時、主を信じてクリスチャンになった。

私は戦争中飛行部隊にいたので地球の外の事も少しは知っている、しかし「マタイ。6：29」に野の花の事が書いてあるが、これが不思議でならない。よく見ると花びらでも葉でも一枚一枚皆違って実に良くできている。工場で作られる部品なら、何百出てきても驚かないのに、自然は何が目的にこんな事をするのだろう.と不思議に思った。

所でこの半世紀の間に世の中が変わった。半導体とデジタル計算機のいわゆる集合天才と言われた方法で、宇宙は隅々まで細かく調査され明らかになって来た。そして地球の構造や宇宙の構造は、人間の調査によってすら秩序だって真理としか言いようが無い。之は唯一全能の神の御支配と言うほか無い。

聖書によれば神の預言はイエスキリストの時までで終わり、以後預言者は出ない。そして終わりが来るという。

全能の父なる神は先に御子イエスをこの世の最低の地位までおつかわしになって我々人間の救いのためにお苦しみになった。今は神により、天地を含むあらゆる領域に於いて、神の一人子として、主にあって救われた我々を待って居られる。我が同胞の日本の諸兄姉.。もしまだ偶像に捉えられていると思ったら、偶像を捨てて、三位一体の神のもとに、ひれ伏そうではないか。

栄光が主にありますように。

戦争について考える（その３）

コルネリオ会　会員　足立順二郎

１．戦争についての考え方

それぞれの個人が抱く戦争についての考え方には大きく分けて二つの部分があると考えている。

一つは感情的なあるいは感傷的な、あるいは宗教観に基づくといったような主として「情」の部分である。私はこれを「戦争観」という。

もう一つは、理詰めに戦争を考えて行く「理」の部分である。私はこれを「戦争論」と名付ける。

戦争観と戦争論とは互いに影響しながら個人の戦争についての考え方を形成している。

戦争観

私の戦争観は次のとおりである。

１．戦はやってはならない

好漢は去らしめられるのである。

愛する人々は分かたれるのである。

いたいけな幼子は苦しめられるのである。

寄る辺なき寡婦は涙にくれるのである。

繰り返しになるが、だから戦はやってはならないのである。

だがしかし、一見はなはだ矛盾しているようであるが、敢えて一戦を辞せざる覚悟と、その覚悟を実行に移すことのできる実力と、その覚悟と実力を制御する知恵と、三つながらを併せて持たないと、いくさを防ぎ民族と国家を長からしめることは難しいと思うのである。剣を打ち直して鋤とし、槍を打ち直して鎌とする日の近からんことを祈りつつそう思うのである。（イザヤ書 2:4 参照）

２．世に正義の戦はない

この人間の世界に正義はない。

我々のいう正義は、汚れた衣のようなものである。（新共同訳聖書イザヤ書 64:5 参照）もっとも、「汚れた衣」といっただけではピンと来ない。しかし、新共同訳聖書にいう「正しい業もすべて汚れた衣」の「汚れた衣」はジェイムズ王欽定訳によれば filthy rags である。これには「経血で汚れたぼろ」という訳があるそうである。

この世に正しい人はいないのである。

義人はいない。一人もいないのである。(ローマ人への手紙 3:10 参照)

この世に正義や義人がないならば、この世に義戦はない。

だが、戦争の当事者たちは皆「自分は正義の戦争をやっている」という。皆正義の旗を掲げて戦う。そして「勝てば官軍、敗ければ賊軍」である。この意味では国が百あれば正義もまた百ある。

戦争論

私の戦争論はおおむね以下に述べるとおりである。

ほとんどすべてを孫子によっている。また、大東亜戦争の従軍体験、海上自衛隊勤務経験にもよっている。

孫子に頼るには理由がある。何回も繰り返して読んだ兵書は孫子だけだったというほかに、岡崎久彦氏が「孫子に勝る兵書はない」とどこかで書いていたのを読んだからである。軍事体験と読書体験の両方からいって本当にそう思うからである。

１．政府

個人が集まって行う殺し合いも戦争であろうが、ここでは国と国との殺し合いを戦争と名付けて考えてみる。

国の定義もまたやっかいだが、孫子の時代から現代に至るまで「国」といわれてきたものが国だと、妙な定義にならないような説明を書いておく。政体とか国体ということには無関係である。

国をとりまとめ取り仕切っているのは政府である。

戦争は政府がやるのである。

政府の長は、名前はともかく、総理大臣である。

ひとりでは国務全部をこなすことはできないから、内閣に分掌大臣を置く。

最小限次の４人の大臣が必要となる。これもまた、名前はともかくである。

国内の諸々のことを管掌する内務大臣。

国にかかわる費用のことまた税金のことを管掌する大蔵大臣。

他の国とのつきあいのことを管掌する外務大臣。
国防のことを管掌する国防大臣。
戦争というものは国の政治の中で、かなりというか非常にというか、大事な部分を占めている。クラウゼヴィッツの言だったとおぼろげに覚えているが、「戦争とは血を流す外交であり、外交とは血を流さない戦争である」のだから、外務大臣と国防大臣の両者は戦争ということについてしっかりした理解と考えを持っていなければならない。その意味で、アメリカのパウエル国務長官がベトナム戦争で実際に戦い湾岸戦争当時統合参謀本部議長だったことは高く評価してよい。軍人は戦争の場合、命令によって死地に赴かなければならないのだから、戦争を知った上で外務大臣になることは大変重要なことである。
また、孫子は冒頭で、「兵は国の大事」と言い切っている。ここでいう「兵」とは戦争のことである。

―次号に続く―

2005'JMCF（コルネリオ会）総会について

総会を毎年 6 月に行っていますが、今年は 8 月に Interaction があり、これを何とか成功裏に終了させたいと思います。よって、それが終了した 9 月に総会を持ち、新しい事業計画や役員改選などを
行いたいと思います。コルネリオ会会則第 10 条には、毎年 1 回総会を開催する旨記載があり、日時については指定がありませんので、今年だけの例外としてお認めいただければ、幸いです。

2005 東アジア軍人クリスチャン研修会の御案内

それぞれの国や国際的な軍人クリスチャンとして、リーダーシップを発揮し、より良き軍人キリスト者になることを目的とした東アジア軍人クリスチャン研修会が開催されます。なお、今回の大会の特徴は、各国の教官によって教育構成されていることです。以下に概要を掲載しますので、皆さん是非ご参加ください。
テーマ：恐れるな！　（ヨハネ 12:15,　1 ヨハネ 4:18）
時　期：2005 年 8 月 12 日～17 日
場　所：〒108-0074 東京都港区高輪 4-7-6
　　高輪東武ホテル　　Tel 03-3447-0111
主　催：コルネリオ会（防衛関係キリスト者の会）
後　援：ACCTS，JMEA（日本自衛隊宣教会）
到達目標
① ACCTS や AMCF の概要について、各自説明できるようになること。
② 誘導的な聖書学習を指導できること。
③ 対話型の祈りについてグループを指導できるようになること。
④ 聖書に立つクリスチャンとして、リーダーシップを吟味できること。（主に仕える者としてのリーダーシップ）
⑤ 各国の教官によって担当課目を教え・実施できること。
参加者：モンゴル、台湾、韓国、日本
　　中隊長クラスの被教育者と教官を含み、日本を除き、各国 4 名以下とします。
会議用語：英語・日本語
登録費用：250 ドル（25,000 円）…全期間の宿泊・食事代含む。
申込み：今市宗雄宛（E-mail:dqnqk735@ybb.ne.jp）に 6 月 15 日までに申し込んでください。

祈りの課題

1 防大聖研のためにお祈りください。
2 イラクに派遣されている自衛隊員の安全のためにお祈りください。
3 コルネリオ会会員の信仰が守られ、それぞれの職場で主の御名が崇められる働きができるようにお祈りください。
4 2005年のINTERACTION(軍人クリスチャンリーダー研修会)日本開催と必要資金が得られるようにお祈りください。
5 インド洋地震津波被害と海外災害に派遣される自衛官のためにお祈りください。

コルネリオ会（JMCF）
（防衛関係キリスト者の会）
コルネリオ会広報室
〒895-0041　薩摩川内市隈之城町 215－4－2－24
圓林栄喜
電子メール:enrin@m9.dion.ne.jp
郵便振込口座 00130-3-87577 コルネリオ会
コルネリオ会ホームページ：
http://www.geocities.jp/samuel1/index.html